花信風

第六号

成城大学国文第六回生
昭和四十八年五月一日発行

花信風

目次

「内的風景」序説・座右の書……高田瑞穂……1
某月某日・座右の書……栗山理一……4
思い出・枕頭の書……田中克己……7
白鳥雑感・座右の書……坂本浩……8
心砦雑記……池田勉……11
無題……山田俊雄……13
今の世を生きる・詩三篇……八木都久子……19
花屋敷周辺……高橋和子……21
次男坊……石山正美……23
五年前の四月のある日と昨年の大晦日……本多弘子……25
恋人におくった童話・詩二篇……高橋睦美……29
子供達・感想……武樋路子……32
「住めば都」と言うけれど……横山育代……33
女将……紫藤邦子……35
吾輩は犬である・詩五篇……佐藤美智世……41
花冷え・うた……林節子……46
街角で会った一人の男の運命……土方美佐子……48
女だてらに股だちとって……木全麻智子……51
一歩……近藤由紀子……55
あかさか・あおやま・ろっぽんぎ……鈴木恵子……57
鎌倉の散歩道……牧野由紀子……60
くやしや幼稚園……堤信子……61
鹿児島へ……梅北淳子……62
早春に思うことども・俳句……重見泰子……65
春の庭……本谷俊子……67
近況……69
クラス会カセット報告……70
住所録……74
編集後記……76

表紙・題字　高田瑞穂

「内的風景」序説

高田瑞穂

先日ある新聞のコラムに、現在の日本人、ことに勤め人の内には、〃マジメ人間〃と〃遊び人間〃という二つのタイプが同居しているという指摘があった。同感を禁じ得なかったので、その一節を引く。

「勤め人にとって、昼は〃マジメ人間〃の時間だ。巨大で複雑なからくりを持つ組織の中の小さな部分品として回転する歯車の一つにすぎない。あってもなくても、大して影響がないこともあるし、そこが止まれば、組織全体の回転がガタガタしてくることもある。部品の重要度には差があっても、共通している大事な規格は〃マジメ人間〃だ。終業時間のベルが鳴ると、ホッとした解放感に襲われる。〃マジメ人間〃でなければならない時間の終わりを意味するからだ。抑圧されてきた〃遊び人間〃が勢いよく手足をもたげてくる。夜のマージャン屋や飲み屋をのぞくと、昼間とは別人のようにはしゃいでいる〃遊び人間〃が見出される。夜は〃遊び人間〃の時間なのだ。」（「毎日新聞」三・一〇）

指摘は正確であり、表現にも生動がある。恐らく筆者自身の内にもこの二種の人間性が存在しているのであろう。しかしコラムは常に、現象の指摘に止まる。結末のところで「二つの顔の使い分けには、きびしいケジメが大切だ。」と記されているけれども、これは問題の解決とは遠い、とりあえずの所置の指示に過ぎない。

人間の内に種々な矛盾の存在することは、何も今日に限られたことではない。恐らく人間存在の初めから、人類

滅亡の終りまで常に在り続けるにちがいないであろう。しかし、今日、特にこのことを重視しなくてはならないという思いの切実であることにも、それなりの理由があると思う。私は、現在の日本人は、その内的風景の錯乱を、錯乱と感じる意識を失いつつあるのではないかと思うのである。そこで私は言いたい。今日の日本の生において、何よりも大切なことは、自己の内的風景の凝視である、と。

自己の内的風景にわれわれは何を見るであろうか。男にしろ女にしろ、勤め人にしろ詩人にしろ、そこに果たして何を見得るであろうか。これが私の、何よりの不安であり、焦燥なのである。

自己の内的風景に目を向けるとき、ある自然の姿が浮かぶ。それは、いつか楽しい旅をしたときの印象である。そして、今年はもっと遠くの、もっと偉大な自然に接したと考えてニッコリほほえむ。そういう場合もあるであろう。或いは、自己の内にある人間の顔が在る。不愉快なその顔は、自分と論争し、自分を存分に痛めつけた憎い顔である。今度こそ必ず打ち負かしてやるぞ、と顔をしかめる。こんな場合もあるであろう。しかしこれらは、いずれも、私のいう内的風景ではない。むしろ、内的風景不在の姿に他ならないであろう。なぜなら、私のいう内的風景とは、如上のその時その場における心情の総てを内包した、全体としての精神の在り方をいうのである。したがってそれは、個性にも人格にもつながる、人間精神の機構と機能とを意味するのである。ある時、ある場合に盛り上がる欲望や夢想は、全く無縁ではないにしても、それがそのまゝ内的風景では断じてあり得ない。幼児や老耄の場合は別として。

「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない。一遍起った事は何時迄も続くのさ。たゞ色々な形に変るから他にも自分にも解らなくなる丈の事さ」

これは「道草」の結びの一節である。晩年の漱石の内的風景が告げられている。

「彼は『或阿呆の一生』を書き上げた後、偶然或古道具屋の店に剝製の白鳥のあるのを見つけた。それは頸を挙げて立ってゐたものの、黄ばんだ羽根さへ蟲に食はれてゐた。彼は彼の一生を思ひ、涙や冷笑のこみ上げるのを感じた。彼の前にあるものは唯発狂か自殺かだけだった。」

これは「或阿呆の一生」の終りに近い第四十九章の一節である。ここにも暗い内的風景が、芥川の作家的熱情の晩照として鮮烈に浮かび出ている。

おたがいに、自らの内的風景を凝視しなければ、自らの生そのものが泡沫となる。今日の日本人の内的風景には神も無く、道も無く、イデアも無いのではないか。しかし、結論を急ぐよりは、ともかくも、自己の内的風景を凝視すること、そのことが大切である。序説はここで終る。

座右の書

パスカル『パンセ』

座右の書を一つにしぼることはむつかしいが、現在の私が、始終手にするものの一つがパスカルの『パンセ』である。心の空白を満たし、心の激動を静め、時にはポンと肩をたたいて心の眠りをさましてくれるのが本書である。全十四編九五八の断章を、前後を問わず勝手気儘に読めばよいのである。最近心に残った一節を引いておく。

「彼がみずから誇るならば、私は彼をへりくだらせ、彼がへりくだるならば、私は彼をたたえる。かくして彼が自己を不可解な怪物であると認めるまで、私はいつまでも彼に言いさからう。」（第四二〇章）

某月某日

栗山理一

三月上旬のことであった。二日ほど用事が重なり、朝早く家を出て、夜おそく帰宅する日がつづいた。目を通さない新聞もたまっている。つぎの朝、九時ごろに目がさめたが、いささか宿酔気味で、頭もはっきりしない。新聞でも読んで午前中をすごす予定でいたところ、家内が、今日は暇ですかという。この調子では仕事になりそうにもないので、まあね、と生返事をしたら、書道展を観に行きたいから、一緒しないか、ついでに上野の博物館に埴輪展があるから、それも観たいという。家内はどういう風の吹きまわしか、一年ほど前から書の稽古を始めている。文字通り六十の手習いというわけである。これまでもいろいろ稽古をやっていたようだが、どれも長つづきはしなかった。ところが、こんどの書だけは性分に合うのか、かなり熱心で、暇さえあれば机に向かっている。先生の指導方針なのだろうが、もっぱら般若心経の書写で、とっかえひきかえ書体の異なるものを飽きもせず稽古している。

結婚以来、間もなく四十年近くになるが、家内を連れて遊びに出る機会などめったになかった。それに数年前からは老夫婦だけの家庭となったが、週の半分は夜の食事を共にすることがない。私といえども仏心がわく。朝食をすませると、また新聞を読む暇もなく外出することにした。

現代書道展は銀座の松屋で催されており、最終日であった。出品者はプロの書家たちであろうが、私にはほとんど馴染みのない名前ばかりである。それはどうでもよいとして、会場を回りながら足をとめて立ちどまるほどの作

品はいくらもない。線は流麗であり、豊潤であり、あるいは闊達奔放でもある。こんなふうに自在な運筆ができたらよいなあと羨しくもなる。けれども心に響くものや胸にささるようなものが感じられない。術はあっても芸がない。アルチザンはいてもアーチストはいない。芸に遊ぶ高い心がないといえばよかろうか。また大相撲春場所が始まっているが、解説者がしばしば口にする言葉に「肩に力がはいりすぎる」というのがある。面白い言葉だと思う。全身に神経をゆきわたらせ、すべての筋肉の動きを機敏に適応させるためには、肩の力を抜いて柔軟なバランスをとらなければいけないというのであろう。会場の作品も力みすぎているのが多い。楽しんで書いたものが少ない。私は懐素や良寛や大雅の書が好きである。その遊心に心ひかれる。その思無邪の境致がなつかしい。

松屋を出て上野へ行く予定であったが、途中の高島屋に華道展が開かれていることを思い出し、寄って見ることにした。これほど多くの分派した諸流があることも初めて知ったが、会場を一巡してもその流派の手法上の区別など私には理解できるはずもない。素人の印象としては、流派の区別など古流と前衛との差を除けば、ほとんど無意味とすら思えた。それにしても騒然とした紛乱がそこにはあった。人いきれと花香が微塵となって会場に充満し、ぎっしりと隙間もなく陳列された花々は互いに嫉視し合い、誇示し合い、はては疲労困憊して窒息しそうに見えた。そこにはさきの書道展にも共通する作為の暴力の支配があり、さらには前者を上回る遊心の欠除があった。花々によせる一片の愛憐の情もなく、花々のひそやかな微笑もない。私ははげしい疲労と苦痛さえ覚えて、雑踏の人垣をぬうようにして会場を後にした。

上野へ着いたのは四時すこし前であった。公園の舗道を歩きながら、樹々をわたってくる微風に面をさらしていると、いくらか生気がよみがえってくるようであった。二つの会場を回って、私の脚はかなり疲れていたが、機械

になったようなつもりで、国立博物館の前までたどりついた。埴輪展は東洋館で催されていた。すこし室温は高すぎたが、人影はまばらであり、天井も高く、憩いの長椅子もある。そこにはアルカイックな素朴と自然があり、庶民の健康な心があった。無造作にえぐりとったと思われる人物の瞳が笑っている。への字を逆にしたような唇が朗かに笑っている。私はまつげの塵を洗い落とし、血のよどれを押し流したような爽快な気分になってきた。

三会場を一気に歩き通した経験は、これまでにもかつてないことである。五時間くらいはかけたであろうか。それにしてもくたびれたし、喉もかわいてきた。帰りは家内の希望で、築地の江戸銀で鮨をつまむことにした。これはうまかった。天下泰平のサービスデーでもあった。

座右の書

愛読書をあげよという注文である。反復して読む興味をそそるものが愛読書であるとすれば、私には読んでみたい本はあっても、その機会には残念ながら恵まれない。時間がないからである。たゞし、最近十回以上も丹念に目をさらしたものに『去来抄』と『三冊子』がある。これは五月末頃に刊行予定の小学館の全集の一冊として、私が校注評釈を加えたものである。芭蕉の芸術論の精髄ともいうものであるが、通例の意味で、はたして愛読書といえるかどうか。

思い出

田中克己

卒業して九年といふ便りをもらった
あのころ、わたしはまだ五十を過ぎたばかりで
頭も口も働いた――とうぬぼれてゐる
ある日ある子に「お茶飲まう」と誘はれ
お茶飲みながらわたしの青春を語った
ある日ある子はわたしの母の国
淡路の洲本を舞台にして
五十枚かの小説を書いた
わたしは批評をたのまれて
「洲本の景色が書けてゐない」と叱った
日本中から景色がなくなり
人情もだんだん薄くなる
お茶に誘ふ友だちが欲しい
景色なぞどうでもいいけれど――

枕頭の書

鷗外訳「即興詩人」

白鳥雑感

坂本浩

私がこの世に生を享けたころは、明治の文学界は自然主義の最盛期であった。国木田独歩・島崎藤村・田山花袋・徳田秋声・正宗白鳥・岩野泡鳴などが、いわゆる現実暴露の作品を次々と発表していた時であった。この自然主義の運動は、夏目漱石・森鷗外の二大文豪をも傍流に押し流してしまうほど強力なもので、これほど名実ともに文壇を一色に塗りつぶした文芸思潮は、百年の近代文学史上に他に類例がないのである。プロレタリア文学運動は辛うじてそれに匹敵するのであるが、この方は名の方が勝っていて、実に当たる作品はむしろ貧弱であった。

正宗白鳥はこの自然主義作家の代表者の一人であって、その作風はニヒリズム（人間否定）のレッテルがはられていた。自然主義は人間の醜面を臆面なくあばきだしたので、次第に絶望的になり、その挙句には虚無的な傾向を生じるに至ったが、その代表者が白鳥であると定着されたのであった。事実において、彼の作品はどの一つを取りあげてみても、ニヒリズムの翳りはおおいがたいものがある。その結果、作品を書くことにも否定的になり、主と

して評論の世界に移っていったが、その評論においても、ニヒリズムを武器として、他の作品の存在価値を斬りすてるといった冷酷さを持ちつづけた。そこに白鳥評論の特色が発揮されたのであった。

ところが時代が経つにつれて、白鳥の自然主義的否定観に対する見かたが、少しずつ変化してきたのである。なるほど彼の小説には暗い否定観はある、けれどそれを徹底したニヒリズムと言い切ってしまえるかというと、暗さの中に漂い出す何ともいえぬ「微光」がどこかに感じられるのである。一見すれば彼の評論には否定的表現が目だってはいる、けれどその裏に相手の作者に対する深い思いやりというものが隠されている。そこに人間嫌いの白鳥が、数多くの人に親しみを覚えさせる秘密があるのではないか——という反省が生じてきたのである。つまり、白鳥という人は、血も涙もない機械のようなニヒリストではなく、実は絶えず夢や理想を追いかけているロマンティスト乃至イディアリストではないか、という再認識が行われてきたのだ。そこから、白鳥のニヒリズムは「仮面」であるという極端な意見さえ出るに至ったのである。

さらに、白鳥の本質への究明は、三転することになった。それは主として、昭和三十七年、彼が八十三歳で逝去する際、「アーメン」と唱えてキリスト教に回信したという事実に即して起こってきた。白鳥は生まれたときから生の不安と地獄への恐怖に悩まされつづけたが、それへの救済を求めて十八歳のとき日本基督教の洗礼を受け、熱心な信者への道を出発した。そして五年後には教会から離れたが、相変わらず聖書と内村鑑三の著作は座右の書として愛読しつづけた。だから、白鳥年譜に、「明治三十四年、二十二歳、この年棄教。」とあるのに対して、宗教心はそう容易に棄てられる筈はない——と抗議している。それが、晩年になって奥さんの熱心な信仰の影響もあって、次第に「郷愁の信仰」として強化され、臨終に際しては、回心を誓って神のみもとに召されたのである。そういった点に着眼して、白鳥を宗教的文学者として把握しようというのが、極めて新しい白鳥観となったのである。

このような観点に立つ人々の中には、自身がクリスチャンであるものも多いが、自然の勢として、どうしても、白鳥の一途な信仰に徹しきれなかった歩みを、高い位置から批判するような傾きが見られる。でなければ、白鳥は恩寵や愛を知らない外道の基督者であると認める立場に立ちやすいのである。私は、この二年間ばかり「白鳥全集」(新潮社)のとりことなり、その精神的な苦悩を考えてきたが、正宗白鳥がその生涯にわたって求道の生き方を貫き通したことに、深く心打たれた。それとともに、八十年の長きに及んで、一足飛びに彼岸の境地に飛躍することを敢えて試みず、自己の道を歩一歩踏みしめながら、「生の不安」を克服しようと苦闘しつづけた態度に頭を下げたい思いに駆られたのである。西洋対日本の根本問題が、新しく考え直されねばならぬ現在、正宗白鳥が背負った十字架の重荷は、最も現代的な意義を持つものであるという感を深くしたのである。

座右の書

「新旧約聖書」

理由は右の一文で明かと思います。

心砦雑記

池田　勉

若い頃には、街路樹のある固い舗道を歩くのが好きだった。靴底にひびいてくる鋭い感触が身体全体に快かった。いかにも、どこかを目ざして歩いて行くという気持がした。ところが、人間の歩みというものは、還暦の年齢をすぎると、回帰の方向を取りはじめるものらしい。この頃は、天気さえ良ければ、一本の杖をひいて田の間の小道を歩きまわっている。農村に生まれて育った私には、やはり、やわらかい土や小石を踏みしめる一筋の細道が、今は心ひかれるのだ。人生の帰り道というものだろうか。そこでは、路傍にタンポポ、スミレ、一茎の小花を摘みあげて、花の造化の不思議な美しさに、しばし我を忘れて見入っている楽しさが、道連れになってくれる。

歩いて行くと、道の左右の所々で、雑草の一面に生い茂った、原野のように荒れてしまった一区画の田畑に行きあたることがある。この何年か歩きなれている道だから覚えているのだが、その田は一、二年前までは確かに、見事に耕された良田であった。それが今では、まるで棄てられたように荒蕪の草野に化してしまったのは、この頃の生産調整とよぶ農業政策の結果であるらしい。そういう愚劣な政治が、農村生まれの私には、ひどく腹立たしく感じられる。一、二年の歳月の間にすっかり荒蕪の原野に帰ってしまう自然の野性の旺盛さ、強烈な野蛮さというものを、まざまざと眼前に見る思いである。こういう野性の自然と闘って、常に耕してやまぬ農民の勤勉な努力こそが、今までの良田を作り保ってきたわけであった。このような絶えず耕し続ける努力を農民に怠けさせる、怠けることを強制したり誇ったりする今日の政策というものが、人間として、たまらなく腹立たしい。そんな事を思ったり感じたりしながら歩いていた私の思考は、結局は私自身の上に帰ってくる。お前の精神の畑も、たえまなく耕しつづけることを忘れていると、眼には見えなくても、あのような荒蕪の原野に帰ってしまうぞ。そういう自戒の思いに一瞬、我を取りもどしては、また歩きつづける。

読書という行為も、この精神の畑を耕すための一つの方途でありうるだろう。そういう読書のために、みずからの座右の書を見つけておくことも、必要でなくはない。私は気のむいた時に、どこから頁を開いても、数十分間の短い読書を味わえる本の一つとして、モンテーニュのエセーを選んでいる。岩波文庫六冊のこの書は、原二郎の翻訳も文章明晰である。文庫本は手に軽く、睡る前の数十分を寝床のなかで読んでみて、眠くなれば灯を消せばよい。幸なことに、この書はモンテーニュという一人の人間を絶えまなく耕しつづけた本であることが、座右の、しかも枕頭の書ともなりうるのである。この本のありがたさである。気に入った文章があれば、鉛筆で、しるしをつけておく。ときには偶然に読み直して、そのしるしをつけた文章に、いくたびもぶつかることがあるのも面白い。モンテーニュという人は、ギリシャやローマの詩人・文人の詩文を、いたる所にあきもせず引用しては、このエセーを書いているのだが、私もまた彼に倣って、そのモンテーニュのエセーから、いつかしるしをつけておいた文章の一つをここに書きぬいてみよう。途中からであるが、

「学問や芸術は鋳型に入れて出来るものではなく、熊が仔熊をゆっくり舐め廻しながら育ててゆくように、少しずついじくり廻し、何度も磨いているうちに形づくられてゆくことを、経験で知ったから、自分の力で発見できないことでも、あきらめずに探ったり試みたりしつづけている。そしてこの新しい材料をこね直し、練り直し、動かし、

温めて、あとから来る者にいくらかでも享受し易いように、より柔かに、扱い易いように道を開いてやる。

あたかも、ヒュメトス産の蠟が太陽に溶けて、指で捏ねられているうちに、いろいろの形をとり、いじられているうちに使い易くなるように。

これと同じことを第二の者が第三の者にするであろう。だからどんな困難も私を絶望させるはずがない。」第二巻第十二章の一節である。いささか長すぎる野暮な引用になってしまったが、野暮をおそれないのが、モンテーニュの精神かもしれぬ。

雨の夜などの心おちつくひと時は、荷風の墨東綺譚が人生の哀歓を語ってくれる。鷗外の「ぢいさんばあさん」という作品も、作者の深い吐息が聴こえてくるようだ。ものの意味を考えてみるときには、アランというフランスの哲学者の著作を繙くことにしている。これは心を正して繙く。理解しやすいとは、ウソにも言えぬ。芸術論・人生論・幸福論など著作は多いが、リセーの一教師として生涯を終始したこの哲学者の教育論は、とりわけ、すばらしい英智の輝きをひそめている。白水社から刊行されているアラン著作集にも収められているが、私は創元文庫のなかのアラン選集第二巻、水野成夫・矢島剛一訳を愛読する。これに添えられた矢島剛一の解説もよい。

無題

山田俊雄

「花信風」といふ小冊子のために、なにかしたためようと思って、書きはじめてみたが、気が進まなくて中途で

止めてゐた。何日か経った。催促ではないけれども、お書き下さるのでせうか、といふ問合せの電話がかかる。結局、近いうちに物にして差上げようと返事をした。

私が書きかけて止めてゐた原稿は、「座右の書」といふ課題に拘泥したもので、どういふ風にしてもほんとうの「座右の書」を持たない私には書きにくいものであった。まして簡便に座右の書は、私の場合こんなものですなどと云って掲げられるわけもない。困惑した状態で筆を執ると、自分が嫌になるばかりである。私は、その注文をはづした方が書きやすいだらうと思って、再び筆を持った。

先日、形ばかりの春休みの旅に出た。あまり旅をしたことのない人に、外の空気を吸はせて見ようと思ひ立ったのだが、結局のところは、ごく近い山中湖畔のあるホテルで、私と子どもが絵を一枚づつ描いただけで終った。

雨の心配をして出かけたのが、その通りになったので、戸外で描くこともできないままガラス戸越しに湖の方に向いてイーゼルを立てた。

雲のやうな、霧のやうなものが絶えずガラス戸の向ふを左から右へ移動する。富士はその裾さへも現はさず、白い世界の奥に静まり返ってゐた。私は、画材をもって来た功労を考へて、何も見えなくても描いて見ようと思った。

この二三年といふもの、油絵の具よりもクレヨンパステルの方が気に入って、やや手馴れて来たやうに思へるので、今度もそれにした。海の向ふで買って使ひ残した紙のパッドになったものに描くのだが、日本式にいふと十二号ほどの大きさである。クレヨンパステルは、昨年買った*Rembrandt*の六十色のセットである。前に使ってゐた*M. Grumbacher*のより、この方が使ひやすい。昨年、軽井沢で描いた白樺まじりの林の画面で、緑が思ふやうに行

ったのから、ずっと私は好きになって、松原湖の朝の太陽を主題にした山と湖面との時も、自分ではたのしく描けた。

ガラス戸越しにホテルの芝生が少し見え、ずっと低い位置につづく松の植え込みから、次第に下降してゆく、落葉樹林、それから水際まで低く深く、向ふ下りになる地形が面白いので、とにかくそれにとりつくことにした。

シーズンオフのホテルは、無遠慮に修繕工事をやらせてゐるので、絵でも描いてゐなければ、とても居られない喧しさである。都会を逃れるつもりで来た、もう一人の人は、私の絵の進行するのを脇から看視してゐて、時折、「そんな風に見えるかしら？」「変な色ぢゃありませんか」などと差出ぐちを云ふばかりで、頗る無聊をかこってゐる。「隣の絵はどうなってるか、見てらっしゃい」などと云って追ひ出さうとすると、「ほんとに、絵を描いて、このやかましさを平気でゐられる人が羨しいわ」といふ。そんな時に、雨がはっきりと白い線を引いて強くふって来る。小降りになると、一面に靄が立ちこめたやうになる。緑も赤も、どんどん明るさを変へる。私は、だんだんガラス戸の外はどうでもよくなって、見ないでしまふ。「あら、あなた、ちっとも見ないで描いてるぢゃありませんか。よく描けるわねえ」。「いや、もう見る必要がないのさ。はじめ、きっかけを作るために見るふりをしてゐただけだよ。」私は少しくたびれて来た。

「さて、ちょっと隣を見て来るか」。隣合せの部屋では、兄の方がカンバスに向ってゐる。長髪のジーンズ穿きは、さながら、グリニッジ・ヴィレッヂ風だが、絵の腕前の方は本格的には最近初めたばかりのわりに、少しは見られる。弟の方は、ベッドの上にころがってルーシーやチャーリーブラウンの登場する漫画を見てゐて余念がない。慎重に、計算して構図をしてゐるところで、まだ何とも云へない。ただ甚だ熱心にやってゐる。風邪を引いてゐる

ので、時々異様な顔つきをして見せる。「まあ、はなをかんで、ゆっくりやるんだね。…なんだい、点描で行くつもりかい？」と聞くと、「いえ、どう致しまして、ながい目で見てやっておくんなさい。へへへ。」と茶化す。

また戻って自分の絵に向ふ。腕時計は五時すぎ。一応の構図がまとまって、大ざっぱに色を置いて見てからが、たのしい。夕食までまだ時間がゆっくり使へるといふので、つい外の暮れ行くのも気づかずに過ごしてしまふ。

ここまで書いて、私は何か自分の主題らしいものに近づきたくなって来た。家族の小旅行のレポートを作ってお目にかけるのが目的ではない。私は、今、考へてゐることをしたためたいのだ。

物を見ることによって出発点が作られるけれども、絵といふものは、見たものの報告ではない。すべて、これ、物を見ることのできる人の考へ得たことのうちの、表はし得た限りのものである。素人写真の画面におけるやうに、撮った人の意識になかった物が再現される滑稽とか、無用の被写体の介在などといふことは、絵の場合はあり得ない。すべて明白な意識にもとづく自分の意志の支配にあるものばかりである。物を見ることのできる人のしわざであるから、現実の模写ではないのみか、現実界を積極的に作り出しもする。「そんな風に見えるかしら？」といふ疑問は、本質的には、無論私に向けられた情念の一つの開花であるから、絵画論のレベルの問題ではない。「変な色ぢゃありませんか」といふ揶揄には、愛すべき驚愕のポーズがたゆたって快いのみであって、色彩感覚の異常をクリティクしてゐるわけではない。ただ天衣無縫のすなほさは、巧まない至言を生むといふことであらう。私はここでまた「座右の書」の方に戻ってみてもよいと思った。

私はここで木下杢太郎の「知」といふ詩を想い出すのである。それをここで全部紹介するのは必ずしも緊要では

ないが、人はいつかそれを読むこともあらう、「知」の果てを考へて「知」もしくは知識を得るはたらきといふものを冷静に俎上に載せてみることが、今、私にとって問題のやうに思はれる。絵は「知」ではなく、むしろ、自己の透徹した世界像をかたち作る作業であり、何よりも行動である。もちろん、思索をふくんだ行動である。読書ーそれは恐らくは万人に「知識」を連想せしめることばであらう。しかし「知」といふダイナミックに上昇した姿で考へてみると、これも一つの行動の形式をもつであらう。しかし思索を缺如することが往々に許されるやうな行動の形式である。いはば思索もどきの形式である。一体、人は読書によって何を果さうとするのだらうか、私には何も云へないやうに思はれる。ここで、たゞ、「知」の典型として、私は鷗外の「妄想」の中の「辻に立つ人」の行動に思ひ当る。

私は鷗外の「妄想」を一種の読書論・学問論として見てゐるわけであるが、或は「知」論でも良い。この文章の中で、「書物の外で、主人の翁の翫んでゐるのは、小さい Loupe である。砂の山から摘んで来た小さい草の花などを見る。その外 Zeiss の顕微鏡がある。海の雫の中にゐる小さい動物などを見る。Merz の望遠鏡がある。晴れた夜の空の星を見る。これは翁が自然科学の記憶を呼び返す、折々のすさびである。」とも述べてゐる。自然科学といつか別れた主人の、日本的風土における自然科学の論が全体の基調をなしてゐるのだが、私は、それを敢へて捨象して読書論・学問論として読んでみてもよいと思ってゐるのである。

私は、文学者の作物を多く読んだ経験はあるが、度々帽を脱するところに到らないで終ったといふことを告白する。多分、それは、「知」の果てを考へさせることすらもできない作品だったからではないだらうか。それとも

私は、饑ゑて食を貪るやうな読み方すらを一度も経験できない性質であるからだらうか。私が、多分身の程をわきまへないのであらうことだけは疑ふ余地はないのだが。また少くとも、私は「座右の書」を掲げて示せといふ注文に到底応じかねることも明らかである。「どんなに巧みに組み立てた形而上学でも、一篇の抒情詩に等しいものだ」私の定義によれば、座右の書とは、たえずそこに立ち戻れば、いつも我が眼を洗はれる思ひを得るやうなものである。そして行動の指針を示すべきものでなければならない。（一九七三・四・一〇）

——原稿到着順に掲載しました——

知

木下杢太郎

知識はめでたし、人、知識を得むとて
精進し、年を老いしむ
知識はうるさし、人、知識を得て
心を硬くし、其純粋を失はしむ
凡への人生は、ただ
彼が識認の一部となりぬ。
あゝ覚者ゴオタマよ
君が明鏡に映りし幾億の世相の影の、
如何にしてか、さは、巨いなる一の
命とは
なりしぞ。

われは広く世界を旅し
われは已に多くを見たり。
われはなほも見んと欲す
わが心、日に日に虚し

八木都久子	小山	三二一ー〇七七五	一五六	世田谷区赤堤二ノ二七ノ六
森川庸子	小林		五六五	吹田市藤白台四ー三三ー一〇
佐々木美岐	佐藤	〇一七七ー三四ー六四六六	〇三〇	青森市造道沢田一一三県病沢田公舎三号
鈴木恵子		九五一ー四七八七	一七一	豊島区目白町四ノ一五ノ一五
梅北淳子	鈴木	〇四五ー八四二ー三一七一	二三三	横浜市港南区大久保町五〇四、日石化学B三ノ三二号
堤信子	武山			市川市中国分四ノ一〇ー六
高橋睦美	鈴木	〇四七四ー六六ー二二一五	二七三	千葉県船橋市飯山満町二ノ五九九
坂崎紀美子	品川	三二三ー一九一三	一五六	世田谷区赤堤二ノ一四ノ九
近藤由紀子	富樫	三三三ー一九四六	一六七	杉並区南荻窪四ノ四一ノ一四　荻窪コーエイマンション六〇三号
武樋路子	三富		二五九	伊勢原市上平間七ー十七
小泉健二		七〇一ー〇九八八	一五八	世田谷区玉川瀬田町八五六
堀内久美子	西岡		一五七	世田谷区祖師谷二ー五二二
林節子		〇四八四ー七一ー四六八五	三五一	朝霞市田島五八二ノ一
重見泰子	福留		七七〇	徳島市庄町一ノ七八徳大蔵本地区宿舎一二号
本多弘子		〇八八六ー六九ー一八七〇	七七〇	徳島市大谷町新堤一〇ノ一四

土方美佐子	三野	三一五ー一〇九四	一六六	杉並区阿佐谷南一ノ二三ー二一　三井東圧化学馬橋アパート
紫藤邦子	宮崎	〇四六三ー七七ー〇一三九	二五七	神奈川県秦野市鶴巻一三八一
高橋和子	宮田	〇七二七ー五七ー〇三二四	六六六	兵庫県川西市寺畑二の五の五全日空花屋敷社宅五〇五
佐藤美智世	村上	三九一ー一三五二	一六七	杉並区荻窪四ー二二ー一八
牧野由紀子		〇四六七ー四六ー二八五五	二四七	鎌倉市大船三ー八ー一七
本谷俊子	山野井	〇四七四ー八四ー七二八一		千葉県八千代市八千代台南二ノ四ノ九
若菜東雄		三七八ー二六〇七	一五一	渋谷区幡谷二ノ四八ノ一　三木ビル三〇一
市川啓子	木下	310 Kuornangroad Carnegie 3163 Victoua Australla		

編集後記

「第六号もやっと印刷にまわせる所まで出来ました」

「今度は、まるで音沙汰のなかった牧野さんが、遠方を来て下さり手伝ってくれたのが嬉しかったワ」

「彼女も、編集など縁がないと思っていたのにお手伝い出来て楽しかったって言ってたワ」「鈴木恵子さんは、編集のプロだから心強かったけど、『花信風』が予算の関係で思うように腕をふるってもらえなくて残念だった」「今号は、今まで忙しくて書いてもらえなかった石山さん、土方さんも、住所がわからなかった武樋さんも、早くに送ってくれたし、だんだん書いてくれる人がふえて張合いがあるわ」

「だけど、級会の時あんなに約束したのに、若菜さん

と小泉さんはとうとう送ってくれなかった。ゴビョウキかしら……ウフフ」

「それにつけても、先生方は変らぬ御好意をよせてくださって……」

「ほんとにありがたい事ね。原稿の〆切日を書かなかったので、原稿の遅れたのが一・二あって一ケ月待ってしまった」

「五号をいろいろな先生方に読んでいただいたら、思いがけず反響があって面白いのよ。ちょっと読むわね」

「山田先生からは『家内が一番先によんで、夕食後のひとときの話題にいたしました』と書いて来てくださった。大学の国文の先生で中村完先生は『皆さん三十女になられたであろうに、女の感じが妙に希薄です』って書いてあるのに、木全さん林さんの文章には彼女達の中の『「女」が、女そのものとして生動していると思いました』とあるのは、ショックだわ。既婚者の方がお色気あるはずなのにネエ」

「中学の校長の石井先生からは、『国文の親分衆の作品を、文春の随筆なんかよりずっと面白く拝読しました』という便りをいただいたの」

「ほら、先輩の小倉さんからも『あなた方の文章自体に生活の年輪、昔では考えられないよさが、出てきつつあるように思います』という事でした」

「『花信風』も六号を迎えて、一応軌道にのったかんじネ。原稿の集まりもよくなったし」

「そうでもないのよ。せめて往復ハガキの返事はほしいワ」

「学生時代全然しゃべらなかった人とも『花信風』のおかげで、心が通じあえて、昔のイメージでなくて新しい仲間だという意識が育ってる感じ」

「最後に、忙しくて原稿はもらえなかったけれど、キヨノが手作りのキャラメルを送ってくれて、皆でたべながら編集しました。おいしかったワ」

（佐藤・近藤・林）

花信風第六号
昭和四十八年五月一日発行
発行責任者　佐藤　美智世
近藤　由紀子
林　節子
印刷　野本印刷